

野上弥生子とゲーテ (二)

― 『ゲエテとの対話』 「第一」 「第二」 ―

田村道美

一

前稿「野上弥生子とゲーテ (一) ― 『伊太利紀行』 及び 『イフキゲーニエ』 ―」では、弥生子が大正十二年八月二日の日記の欄外に記した「ゲーテのイフゲナイアをよむ。」の「イフゲナイア」とは、同年五月二十日に刊行された舟木重信譯『タウリスのイフキゲーニエ』（岩波書店）であることを指摘した。併せて、弥生子がこのとき『タウリスのイフキゲーニエ』を読んだ理由として、当時ギリシア悲劇に傾倒していた夫豊一郎の影響が大きいことを指摘した¹⁾。

本稿では、大正十三年十一月から翌年の一月にかけて弥生子が読んだ「ゲーテとの対話」の訳本を特定し、ついで日記に言及された箇所を特定し、さらには同『対話』が弥生子自身の作品にどう活用されているかなどを中心に見ていきたい。

弥生子は大正十三年十一月十三日に日記に次のように記している。

十三日

野上弥生子とゲーテ (二)
― 『ゲエテとの対話』 「第一」 「第二」 ―

父さんは今日学長や竹内さんと学校の敷地を見に行つて七時頃に帰る。吉祥寺の先を二ヶ所見たのださうな。明後日また一ヶ所見に行く筈。住宅組合の低利資金の借入も出来た由、最高四千元。それで土地を買つておくとよいとおもふ。千坪位。この間ゲエテの対話をよんだ時、ゲーテ・ハウスの樹がゲエテが四十年前に植えたのだといふくだりをよんで感動したことをおもひ出す。家は小さくともよろしい。樹木は多くなければ。同時に知識的なよい隣人を持ち度いとおもふ。しかし日本では男はしらず女はそんな気をおこしても絶望である²⁾。

昭和五十二年、弥生子は「文学と思想」と題する対談の中で、対談相手の中村哲に対して、「たとえば、あれ、御存知ないでしょうか、『ゲーテとの対話』のもの、亀尾英四郎さんの翻訳。あれが初めて二巻ものが出たときなんか、一字一字暗記するほど精読し、「宮本」百合子さんにも読むことを勧めたものでした。³⁾」と語っている。弥生子がここで言及している『ゲーテとの対話』とは、春陽堂から刊行されたエツケルマン著、亀尾英四郎譯『ゲエテとの対話』「第一」（大正十一年十一月

二十一日)と同「第二」(大正十三年九月五日)である。ゲーテがエツケルマンに自分の庭園の樹木は四十年前に自ら植えたものだと言った件は『ゲエテとの對話』「第一」の一四二―三頁に見える。一八二四年三月二十二日、エツケルマンはゲーテの庭園を案内される。エツケルマンは丘の上からの眺望を楽しみたい旨をゲーテに伝えると、ゲーテはそれに同意し、先に立って坂を登り始める。

坂の反対の側へうねうねとした道を下りながら、私は灌木にとり圍まれた次のやうな有名な詩の句を刻んだ一つの石を見つけた。

Hier im Stillen gedachte der Liebende seiner Geliebten ——

此處で静かに男が戀しい女を想ふた。

そして、私は現に古典めきたる場合に居るやうな氣がした。

そのすぐ近くに半ば生長した柵や樅や、白樺や山毛櫸の木の群があった。(中略)

樹木の群を廻つて再び家の近くの大道に出た。今しがた廻つて来た柵や樅や白樺や山毛櫸は互に交り合つて、真中の空地の上に半圓形の天井を描いてゐる。その中で、圓い机をとり圍んでゐる小さな椅子に二人は腰を下ろした。

太陽は非常に強く、落葉した樹のささやかな影がもう氣持ちのいいほどであった。『夏の日盛には』と、ゲエテは言つた、『こゝが何よりの避難所だ。私はかういふ樹木を四十年前に全部自分で植えつけた、以前は樹木の大きくなつて行くのが楽しみだったが、今ではもうこの涼しい樹蔭を楽しめるやうになつた。柵や山毛櫸の葉は強い日光でもとほらない。暖い夏の日の晝食後には此處に腰を下ろしてゐるのが好きだ。ともするとこの草地から公園一體にかけて、昔の人々が牧神が眠つてゐるとも言ひさうな、静かさが支配するからである。』

かれこれする内、町で二時を打つ音が聞こえたので、我々は家へ歸つた⁽⁴⁾。

樹木に囲まれた静かな環境の中で、読書や執筆に専念したり、「知識的によい隣人」と知的な会話を楽しみたいというのが弥生子の夢であった。彼女の夢は後年、北軽井沢の山荘と田辺元という形でかなえられる。大正十三年十一月十三日の日記の中で『ゲエテとの對話』「第一」中の一節に言及してから一ヶ月後の十二月十六日の日記に、弥生子は次のように記している。

十六日 ゲエテとの對話集(下巻)をまたぼつぼつよんでゐる。いろいろなことを考へさせられる。ゲーテほどの人でもひどい推敲をしたのだ。チロル人の小唄をきいて、ゲーテ家の人たちやエツケルマンなどが感心するのをゲーテは組しないで、『桜ん坊や苺の味は雀と子供に聞け』と云つてゐるのをおもしろくよんだ。斯んな言葉や警句を引けばきりが無いのだが。―夏目先生の木曜会の話なども氣をつけてよく書いておくとよかつたのだとおもふ。小宮さんなどなればよかつたとおもふ⁽⁵⁾。

「ゲーテとの對話集(下巻)」とは『ゲエテとの對話』「第二」のことである。ゲーテが「桜ん坊や苺の味は雀と子供に聞け」と言つたエピソードは『ゲエテとの對話』「第二」の最初の頁に紹介されている。

千八百二十八年六月十五日、日曜

われわれが食卓についてしばらくすると、ザイデル氏(Saidel)はチロル人を伴れて来た。開け放たれた戸から姿がよく見え、歌がほどよく聞えるやうに、歌ひ手達は圓亭にとほされた。ザイデル氏はわれわれの食卓にむかつた。快活なチロル人の小唄やゲヨオデル(チロル人特有の歌)をわれわれ若い者は面白がつた。ウルリケ嬢と私は特に『花束(Strauss)』と『君よ、君はわが心に(Du, du liegst mir im Herzen)』と

が気に入った、われわれはその原本を求めた。ゲエテ自身はわれわれのように面白がつてゐなかつた。『櫻ん坊や苺の味』と彼は言った、『子供や雀に聞け』歌の間まにチロル人はいろんな國振りの舞踏を、一種の横にした弾琴と唸らな横笛とに合はせてした⁶。

弥生子はゲーテがチロル人の小唄やヨーデルといった素朴な芸能を「櫻ん坊や苺」に喩えたが愉快であつたらしい。

一八二八年九月十一日、エツケルマンはゲーテが自分の全集に収録予定の『ウィリアム・マイスターの遍歴時代』の改作に苦心していると記している。弥生子の言う「ゲーテほどの人でもひどい推敲をしたのだ。」とはこの箇所を指しているのであろう。

かゝる一切の目前の事を一層煩はしくした一つの事情を私はみのがしてはならない。「遊歴時代」の入る筈の彼の全集の第四巻はクリスマスに印刷へ渡さねばならなかつた。昔一卷で出したこの小説をゲーテは全然改作してゐた、昔のものに多くの新しいものと合せて、新版では三巻にしてだすつもりである。もつともかなり出来てはゐるが、まだ終まぬところがよほどある。草稿にはまだ埋ねばならぬ白いあきがいたる所にある。或はエクスポヂションにみたぬところがあへねばならぬ。かやうにして、この重要な書を同時に氣持よく、典雅にするには、三巻を通じて、まだ非常に多くの修正が要る⁷。

弥生子は漱石山房における木曜会に出席したことは一度もなかつたが、漱石の門下生の一人であつた夫豊一郎からその模様や話題について詳しく聞いていた。

私は、この、夜の木曜会というものには、一度も列席いたした事

はございません。(中略)しかし、私は、木曜会のことは非常によく知っております。それは、才氣煥発なお仲間の末席に座つて、おとなしく聞き手のほうへ廻つていたであろう野上は、存外こまかいことを見聞して来て、みやげ話に、きょうはどういう作品が読まれたとか、それがどういふ批判を受けたとか、そうして、先生がどうおっしゃつたとか、高浜さんがどうだとか、そういうふうなエピソードを、いろいろ聞かしてくれました⁸。

「夏目先生の木曜会の話なども氣をつけてよく書いておくとよかつたのだとおもふ。」とは、自分や門下生がそうしなかつたことへの強い後悔の言葉ととれる。なお、「小宮さん」とは漱石の門下生小宮豊隆である。小宮は十五年後の昭和十三年七月に漱石の伝記『夏目漱石』(岩波書店)を著わしている。

二

翌年の大正十四年一月十日の日記にも、『ゲエテとの對話』「第二」を讀んでの感想がしたためられている。

十日

又『ゲエテとの對話』をもときどき読む。これもいつよんでも興趣がつかない。抜き書をしかけれど殆んど全部を書かなければならないわけだが、この間よんだところで、『自分の洒落の一つひとつには金袋がついてゐる。あらゆる経験を積むために五十万円の私財を使い、また今まで文学的労作から来たおびたゞしい金を使い、大公からは百五十万円の金まで出た』といふ言葉をよんで、いかにもゲーテらしい話だとおもへた。一代の代表的人物と一緒に会食するほどでなければ、すっかり社会を見つくしたとは云へないといふのである。これは

ゲーテにてはじめて云ひ得ることで、又この点東洋の隠遁的な文人と行き方のちがふところだとおもふ。又斯ういふ言葉も記憶に深く刻みつけられた。それは、大公のやうな壮麗な家に住むと、無為にしてなまける気になる。自分たちは矢張りこの粗末な不秩序ジブシー風の家にゐる時が一番自由で活動的になるといふのである。ゲーテの如き人にしてもこの言があるかとおもへた⁽⁹⁾。

弥生子が鉤括弧付きで記した箇所『自分の洒落の一つひとつには金袋がついてゐる。あらゆる経験を積むために五十万円の私財を使ひ、また今まで文学的労作から来たおびたゞしい金を使ひ、大公からは百五十万円の金まで出た』は、一八二九年二月十三日に、ゲーテがエツケルマンに語つた次の言葉を要約したものである。

『かゝる一切に通ずるには年をとらねばならない、又自分の経験を購ふに十分な金を持たねばならない。私の洒落の一つ一つには一袋づつの金がかかつてゐる。五十萬の私財が今の私の知識をうるために無くなつて了つた、たゞ私の父の全財産だけでなく、私の俸給も、五十幾年來の莫大な文學的方面からの収入もさうだ。加之偉大な目的のため百五十萬の金が、私と親密にしていたゞき、その行動や幸不幸にたゞさはらせていたゞいた侯爵から出てゐる⁽¹⁰⁾。』

日記にある一文「一代の代表的人物と一緒に会食するほどでなければ、すつかり社会を見つくしたとは云へないといふのである。」は、右の引用文のすぐあとに続く一節『才能丈けでは不充分だ、卓識をつむにはそれ以上のものが要だ。大きい環境の中に暮らさねばならぬ、その時代の花形連が骨牌をとつてゐるのを見たり、自ら勝敗に加はるやうな機会をつかまねばならない。』を弥生子流に言い換えたものであろう。また、「東洋の隠遁的な文人」と社交を重んじる西洋の文学者の「行き方」の

違いにも思いをいたしている。

「大公のやうな壮麗な家に住むと、無為にしてなまける気になる。」旨の発言をしたのは、一八二九年三月二十三日のことである。この日、ゲーテはエツケルマンに対して次のように語つた。

『華やかな家屋と室とは王侯や富豪のものである。さういふ中に暮らすと、落ちつき、満足して、何もしたくないやうになる。』

『私の性質はさういふことにまるで合はない。カルルス、バアドに持つてゐるやうな華やかな家にあると無性に無爲になる。それに反して今われわれのゐる一種の不秩序な秩序があり、ジブシー風な所のある貧しい室のやうな、過当な家が私に合ふ、内心がのびのびとし、活動的になり進んで働くやうになる⁽¹¹⁾。』

ゲーテでも恵まれすぎた環境の中では無為になりがちであつたことを知り、天才にもきわめて人間的な弱点があるのを知り共感を覚えたのであろう。

四日後の大正十四年一月十四日の日記には、『ゲエテとの對話』「第二」に対する比較的長い感想が記されている。

十四日

午前はゲーテ。ゲーテの死に対する沈着をひどくかんじた——大公母の死の時、又はエツケルマンと共に伊太利旅行に立出して、ローマで頓死した息子の若いゲーテの死に際して——またフアウストの二部がどうして完成されたかの順序に深い感銘をおぼへた。八十余歳の老人のあの勢力と芸術的精進をおもふと、ぐゞぐゞしてはゐられない気がする。

しかししたゞこのエツケルマンの著作に於て残念なのは、これはゲーテにこびないまでも、ゲーテの幻影と威力から瞬間も脱することの出

来なかつた者の書きものだといふことである。且つ、ゲーテの目を通して出版されたものだ。エッケルマンが自由に批評的態度で書いたものではないのだから、これほど委しくかいてありながら、ゲーテの眞の生活といふものがはつきり読者の頭にひびかない恨みがある。少くともその内的生活は分らない。これはゲーテの芸術的生活と外的生活の最も美しい記録と云ひ得るが、眞の生活記録ではない¹²⁾。

エッケルマンは大公母が薨去したときと、息子が事故死したときのゲーテの様子をそれぞれ次のように記している。

千八百三十年二月十四日、日曜

この午後食事に招かれてゲーテの許へゆく途次、ちようど大公母が薨去されたとの報に接した。このために年とつたゲーテにさはりがなければいゝがとすぐ思つた、そして多少案じつゝ家に入った。(中略)五十年以上も、と私は考へた、彼は大公母にお仕へして特別の恩寵を蒙つてゐた、大公母の死を非常に嘆くにちがひない。かう考へながら私は彼の室に入った、然し彼が非常に快活に元氣、婦人や孫とともに食卓にむかひ、事もなげにスウプをたべてゐるのを見て、私は少なからず驚いた。(中略)彼は、あたかも世の悲しみに動かされない高い存在物のやうにわれらの目の前に座つてゐた¹³⁾。

今日の新聞をみると彼の一人息子が伊太利で卒中で死んだとある(中略)私が最も心配したのはゲーテが非常に年とつてゐて「当時八十一歳、引用者注」父親の情の烈しい嵐にたへるであらうかといふ事であつた。(中略)ゲーテの室に下りて行つた。彼は毅然として直立して私を兩腕に抱いた。彼は全く快活で落ついてゐた。二人は腰を下ろしてすぐと如才ない話をした、そして私は再び彼の許にかへつて非常にうれしかつた。彼は私に二通の手紙をみせた、ノルドハイム

の私宛に書いたが、出させないでしまつたものである。われわれは大公妃や王子やその他いろいろの話をしたが、彼の息子の事は一ことも口にしなかつた¹⁴⁾。

大恩人の大公母と愛すべき息子の訃報に接しても、ゲーテは全く悲しみを表に出さなかつたという。弥生子はこの箇所を読んで、「ゲーテの死に対する沈着をひどくかんじた」と記しているが、筆者にはゲーテのこの反応はきわめて不自然と思える。ゲーテが「世の悲しみに動かされない高い存在物」であることを演じているか、あるいはエッケルマンがゲーテを神格化しているのしか思えない。

『ファウスト』第二部がどのような順序で、どのような苦心を払って完成されたかは、『ゲーテとの對話』「第二の一五〇頁(一八二九年十二月六日)から三四五頁(一八三一年六月六日)に互つてとびとびに記されている。そしてこの戯曲が完成したとき、ゲーテは「以後の私の壽命は全くの贈物のやうな氣がする、畢竟何をしやうとしまいと同じことだ¹⁵⁾。」と語つたという。八十歳を越えたゲーテが全精力を傾注して『ファウスト』を完成させたことを知つて、弥生子はゲーテの「勢力と芸術的精進」に大いなる刺激を受けている。

ところで、弥生子は人間としてのゲーテ、芸術家としてのゲーテに深い感銘を受けると同時に、エッケルマンの書き記した『ゲーテとの對話』の欠点にも氣づいてゐる。その欠点とはゲーテという対象への心理的距離が欠けていることである。『ゲーテとの對話』が結局はゲーテ崇拜者の描いたゲーテの美しい肖像に終つてゐることに弥生子は不満を感じてゐる。彼女は、たとえば、ナポレオンの妻ジョゼフィーヌを主人公とした『真珠』、『大内良雄』、『秀吉と利休』等の歴史に取材した小説で、神格化された人物を複雑な性格を持った生きた人物として描こうとした。彼女の関心は人間の「複雑怪奇な感情¹⁶⁾」を知ること、描くことであつた。

野上弥生子とゲーテ(二)

一『ゲーテとの對話』「第一」「第二」

『ゲエテとの対話』を「真の生活記録ではない」と断じた翌日、弥生子は『ゲエテとの対話』「第二」を讀了している。

十五日

ゲーテがすんだ。長いたのしいよみものであつた。私はこれに依つてゲーテの偉大と同時に平凡と芸術家としてのまた人間としての各部にふれることが出来た。慾には彼の婦人とのつながりを今少し委しく知り度い。これは単なる好奇心ではない。あれほど多くの婦人に動「か」されたゲーテは、その動きの中に最も彼らしい彼を見せるに相違ないとおもふからである。

続けてイタリー紀行を讀まうかとおもつたが、あと廻しにしてアリストテレスの詩学を讀みはじめた¹⁷⁾。

ゲーテとエッケルマンとの対話は、主に文学、演劇、絵画、音楽、宗教、自然、科学、外国旅行等、さまざまな分野からなつてゐる。知的関心の強かつた弥生子はこれらの話題を充分堪能したのである。しかし、前日の日記にも記しているように、弥生子はゲーテの内的生活について知ることのできないことに不満を感じている。『ゲエテとの対話』にはゲーテの女性についてのことは全くといっていいほど記されていない。ゲーテに対するエッケルマンの態度、ゲーテの年齢等を考えると、弥生子の期待は無理であろう。

なお、『ゲエテとの対話』「第二」の終わり近くで、エッケルマンは次のように記している。

千八百三十一年三月二十五日 金曜

ゲエテは私に一つの華奢な緑色の安樂椅子を見せた、この頃ある公賣で買はせたものである。

『しかしこれはあまり或は全く使はないだらう。』と彼は言った、

『何故なら氣樂な類のものはみな私の性質にまるで合はぬからだ。私の空にはゾファが一つもあるまい。私はいつも古い木の椅子に掛けてゐる、頭のために凭れをつけたのはつい二三週間前のことだ。便利な優美な道具にかこまれてゐると考へが散り、私は氣樂に消極的になる。青年時代から習慣になつてゐる人は別だが華やかな室や優美な家具は思想を持たない人か或は持ちたくない人のものだ¹⁸⁾。』

弥生子は昭和三年五月二十五日の日記に次のように記している。

さてこの家具「五月八日、フランス展で見たフランスの有名凶案家たちの考案になる家具」でおい出したが、(中略)これ等の間でこれ等の調度に順応した生活を朝夕せねばならないとなると苦痛であらう。即ちこれに準じた着物を着、立ち居ふる舞をし、談話をせねばならないとすれば、丁度舞台の人物のやうに。自然にそれが出来るやうな階級に生れついたものは別として、我々にはとてもそんなひまも心の余裕もありはしない。言葉だつて、せりふのやうな洗練された洒落か詩のやうな甘い囁きかより外には不適當である。それにつけてもゲーテの言葉をおもひ出す。彼は何かの競売で青い絹ばりの椅子を二つ買ったが、そんなものをふだん使つて、は頭の仕事は出来ないと言つたあの意味の言葉を。——簡素と単純と安静これより外に我々の住みうべき世界はない¹⁹⁾。

弥生子は大正十四年一月十日の日記に、「又斯ういふ言葉も記憶に深く刻みつけられた。それは、大公のやうな壮麗な家に住むと、無為にしてなまける気になる。自分たちは矢張りこの粗末な不秩序ジブシー風の家にある時が一番自由で活動的になるといふのである。ゲーテの如き人にしてこの言があるかとおもへた。」と記している。読書や執筆といった知的活動には「簡素と単純と安静」が必要と常々考へていた弥生子は、

ゲエテも同じように感じていたことを知り、この箇所が「記憶に深く刻みつけられた」ようである。そして、「華奢な緑色の安樂椅子」に対するゲエテの見解も弥生子の生活信条に合致したものとしてみれば、記憶に残ったのであろう。この「華奢な緑色の安樂椅子」はこの時構想中であつた『眞知子』の中で利用されている。『眞知子』の最終章である第九章に、術学家である山瀬が自分の書齋で河井輝彦を相手にして、この逸話を自慢気に語る場面がある。

眞知子の返事に、山瀬は急いで自分も續け、當時の夢の切れつ端「台湾大学に就職が決まりかけていたこと」を眼鏡のかけで追うた。「残念でしたが、つぎの機会には優先権を持つてゐるわけですから、まあそれを待ちますよ。でこほこの疊で押し通してゐるのもそのためなんです。——しかし思ふに、あなた方のやうな豪華な生活に馴れてゐられる方は別でせうが、われわれの如き貧乏な學徒に取つては書齋は簡素なほい、ですね。寧ろ必要です。それに就いて思ひ出すのは、御存じのエッケルマンとの對話に出て来るゲエテの青い椅子の話です。」

『青い椅子を、ゲエテがどうかしたのですか。』
『たしか競賣かなんかで買ったんですが、自分の書齋には、青い絹の椅子が贅澤すぎて落ち着けなくなると云ふのです。黄金のインク壺からでも平氣に書けた筈のゲエテにしてこの言葉があるかと思ふと、——そう深い意味を感じさせられますね。』

大正十四年一月十五日の日記の引用部分の最後で、弥生子は『ゲエテとの對話』を読了後、「イタリイ紀行」を読もうと思つたと記している。この「イタリイ紀行」はゲエテの『イタリア紀行』のことであらう。「野上弥生子とゲエテ(一)」「伊太利紀行」及び「イフキゲエニエ」で論じたように、弥生子は「大正六年二月一日以前に高木敏雄訳『伊太利紀

行』(隆文館、大正三年五月七日)を読んでいる。なぜ、『ゲエテとの對話』「第二」読了後にこの作品を読もうとしたのであろうか。この疑問を解く鍵は、大正十四年十月三日の日記の一節に求めることができる。弥生子は同日の日記に「大村からゲエテ詩集を送つて来たので一昨日かよんだ。三浦吉兵衛氏の訳。(中略)斯んな表現しか出来ないとすれば、ゲエテ詩集は、むしろゲエテ全集は翻訳されない方がゲエテのためによかつたといふ氣さへする²¹⁾。」と記している。この一節に見える「大村」、「ゲエテ詩集」、「三浦吉兵衛氏の訳」、「ゲエテ全集」から、この日記の中で言及されている「ゲエテ詩集」とは大村書店版『ゲエテ全集』第一巻「詩集」(三浦吉兵衛譯、大正十四年八月二十日)であると分かる。また、この全集の奥付には「非賣品」とあるから、この全集は予約出版物であり、野上家では大村書店版『ゲエテ全集』を予約購読していたと考えられる。

大村書店版『ゲエテ全集』の第一回配本作品は第十三巻『伊多利紀行』(吹田順助譯)『伊多利に就いて——ある旅行記の斷片——』(吹田順助譯)であり、発行年月日は大正十三年十二月十五日である²²⁾。弥生子が『ゲエテとの對話』「第一」「第二」を「一字一字暗記するほど精読」していたのは、大正十三年の十一月と十二月であり、読了したのが十二月十五日である。読了したその日か、数日前に大村書店版『伊多利紀行』が届いていたので、ゲエテに夢中になっていた弥生子は十年ほど前に高木敏雄訳では読んでいたものの、新訳で再読してみようと思つたのであろう。

注

(1) 田村道美「野上弥生子とゲエテ(一)——伊太利紀行」及び「イフキゲエニエ」(『香川大学教育学部研究報告第一号』第八十四号、香川大学教育学部、一九九二年一月)。

(2) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一巻「日記一」(岩波書店、一九八六年)、一五八—一九頁。

- (3) 『野上彌生子全集』別巻二「対談・座談二」(岩波書店、一九八二年)、三〇四頁。
- (4) エツケルマン著、龜尾英四郎譯『ゲエテとの對話』「第一」(春陽堂、大正十一年)、一四二―一三頁。
- (5) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一卷、一六三頁。
- (6) エツケルマン著、龜尾英四郎譯『ゲエテとの對話』「第二」(春陽堂、大正十三年)、五頁。
- (7) 同書、一〇―一頁。
- (8) 野上彌生子「夏目先生の思い出」、『隨筆一隅の記』(新潮社、昭和四十三年)、九二―三頁。
- (9) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一卷、一六八頁。
- (10) 『ゲエテとの對話』「第二」、六九頁。
- (11) 同書、八八頁。
- (12) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一卷、一七〇頁。
- (13) 『ゲエテとの對話』「第二」、一八三頁。
- (14) 同書、二四四―六頁。
- (15) 同書、三四五頁。
- (16) 野上彌生子「私と『アンナ・カレニナ』」、『隨筆一隅の記』、九二―三頁。
- (17) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一卷、一七〇―一頁。
- (18) 『ゲエテとの對話』「第二」、三二九―二〇頁。
- (19) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二卷「日記二」(岩波書店、一九八六年)、二四四頁。
- (20) 野上彌生子『眞知子』(文藝春秋新社、昭和二十二年)、二九五―六頁。
- (21) 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第一卷、三二八頁。
- (22) 『明治・大正・昭和翻訳文学目録』では、吹田順助訳『伊太利紀行』の発行年が大正十四年となっているが、これは誤りであり、正確な

発行年月日は大正十三年十二月十五日である。